

# R-PDCA サイクルの視点を取り入れた校内研究の在り方

## ～授業改善につなげるための方策として

横浜国立大学教職大学院 教育学研究科高度教職実践専攻

齊藤 真弓

### 1. 学校の現状と課題

A 中学校は、8年前に「『学び合い』の授業実践による授業力向上」を校内研究テーマに掲げ、以来7年間このテーマの下で授業研究に取り組み、年2回の校内授業研究会を継続実施している。これにより、校内研究の風土はある程度定着していると言える。

しかし、大規模中学校であることから毎年教員の異動が多く、研究テーマが学校全体の取組として定着しない。年を追うごとに「学び合い」の授業実践に難しさを感じる声が増えていき、そこに学習指導要領の改訂が重なり、テーマの転換を求める声も聞かれるようになってきた。もともと PDCA サイクルの視点が不十分で、P→D→P→D→…を繰り返すサイクルに陥っていることが見えてきた。PDCA サイクルを校内研究の中に構築し、さらに校内研究を、授業改善を促す歯車として位置づけ、日常の授業と校内研究が相互に関連していく構造を創ることが、質の高い校内研究になっていくことにつながると考える。

### 2. 研究の目的

本研究では、日常の授業改善を促す歯車として機能する校内研究の在り方を探る。校内研究に R-PDCA サイクルの視点を組み込み、特にこれまで A 中学校の校内研究で行っていなかった現場のニーズや実態把握を R(Research)として扱うことと、C(Check)、A(Action)に相当する手立てを施すことにフォーカスする。新しい学習指導要領の動向を踏まえた、現場のニーズに合った質の高い校内研究としての R-PDCA サイクルの型を構築し、それが回っていくことで、校内研究の歯車が日常の授業改善を押し上げることにつながると考えられる。

### 3. 課題解決の方法および評価

現場の教員のニーズを把握する Research として、授業実態アンケートを6月に実施し、アンケートから把握したニーズを踏まえて、年間校内研究計画を作成する。1回の研修・研究会に PDCA サイクルの視点を入れ、これまで機械的に実施していた研修会や授業研究会を見直

し、次の研修・研究会の改善につなげる。校内研究の PDCA サイクルは、今年度の研修・研究会の回数に合わせて3回行う。また、生徒の授業評価アンケートを7月に実施し、その結果を教師に示すことで、各教師が現状のメタ認知をし、校内研究の主體的な取組や活性化、さらにその先の授業改善へと促す。今年度の校内研究が全て終了した後の12月に教師向け授業実態アンケートを再度実施し、授業や校内研修・研究への意識がどのように変容するかを分析する。生徒の授業評価アンケートも2月に再度実施し、教員の授業改善の動機づけにどのくらいの影響を与えたかを分析し、来年度の校内研究テーマの設定や授業改善の取組へとつなげる。

### 4. 結果と考察

授業実態アンケート項目のうち、研究テーマへの意識と授業改善について、6月と12月の結果を比較した。両方の項目とも肯定的な回答が増え、現場のニーズに添った研究・研修を重ねることで、前向きな意識が生まれ、授業改善のための校内研究であるという意義や目的が果たされるようになったと考えられる。また、校内研究・研修で学びがあったかを問う項目においても、95%の教員が肯定的な回答をしており、1回1回の研修や研究会で、個々の教師が校内研究で学びがあると感じるから研究テーマへの意識が向上し、さらに授業改善に生かそうとする意識も高まるという循環作用が生まれていることが推察できる。

本研究を通して、一連の PDCA サイクルを丁寧に戻すことで、現場の実態に合った校内研究を進めることができ、そのサイクルを回す上で、Research がとても重要な意味をもつことがわかった。さらに、結果分析を周りの教員と、研究の意義や意図と共に共有し、周囲を巻き込みながら進めていくことも大切であると言える。

### 主な引用・参考文献

- ・文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編」
- ・広島県立教育センター(2014)「授業研究ハンドブック～学校における授業研究の質的向上を目指して～」



